

木の目草の芽

木の目草の芽

2017年6月28日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料1,000円
申込:047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4710688
加入者名:川口章子

第128号

～全国集会レジュメ号～

〈目次〉

- P.1 全国集会、岐阜で開催
山田 和人
- P.2 プログラム
- P.3 基調講演 清水 政美
「伊吹山の外来植物」
- P.4 分科会 西條 好迪
下野 綾子
清水 政美
- P.6 フィールドスタディ
伊吹山自然観察会
- P.7 支部報告
- P.8 活動記録

自然保護全国集会、岐阜で開催

実行委員長 山田 和人

2017年の自然保護全国集会は、岐阜支部の協力を得て開催することになりました。テーマは、「外来種に怯える山の植物たち」です。

日本の国土は、その地形的及び地理的位置により世界でも特異な気候環境となっており、その中で様々な動植物がダイナミックな係わり合いをもちながら自然環境を作り出しています。私たちは特に山岳地帯の自然環境に着目し、その恩恵を受けながら登山活動をしています。その自然環境は、少しずつではありますが、確実に変化していく訳ですが、現代は自然の遷移とは別の外圧に晒され続けてい

ます。人間の開発による地形・植生改変、地球規模の気候温暖化、特定動物種による植生の急激な変化、そして外来動植物による遷移パランスの崩壊、さらには人為的な放射能汚染等々。

今回は、特に外来植物が山の植生にどのような影響を与えているのか、どのような問題が起こっているのかを考え、討議する場を企画しました。財団法人 自然学総合研究所から清水先生をお招きして「伊吹山の外来植物」と題した発題をしていただき、その後、(1)高山帯(2500m以上)、(2)亜高山帯(1500m以上)、(3)山地帯(500m以上)の分科会

で現状の確認と対策について考える予定です。恒例のフィールドスタディは、岐阜県と滋賀県に跨る伊吹山(1377m)に登ります。深田久弥の百名山にも選ばれた山です。標高はさほど高くありませんが、冬の季節風の強い影響を受けた植生は、山頂付近には高木がなく、北方性の高山植物または亜高山性植物が分布する山地草原が発達しています。かの牧野富太郎博士もその豊富な植物相に注目し、伊吹山の植物研究をおこなっています。またこの山は、古くより薬草の採れる山として大切にされ、伊吹の百草(もぐさ)を題材にした恋の歌が百人一首に選ばれています。きっと多くの植物に触れられる楽しい一日となることでしょう。

岐阜で皆さんとお会いする日を楽しみにしています。

公益社団法人日本山岳会自然保護委員会
2017年度自然保護全国集会
テーマ「外来植物に怯える山の植物たち」

◆ 7月9日（日） 自然保護全国集会 ～岐阜支部との共催～

会場：岐阜市「十八楼（じゅうはちろう）」2階 扇の間
〒500-8009 岐阜県岐阜市湊町10番地
Tel 058-265-1551

- 10:30～11:00 受付開場
11:00～13:00 支部報告
13:00～13:50 - 昼食 -
14:00～14:15 日本山岳会常務理事挨拶
来賓挨拶
14:20～15:50 基調講演「伊吹山の外来植物」
清水政美氏（財団法人自然学総合研究所 主任研究員）
16:00～17:30 分科会
①高山帯での課題
②亜高山帯での課題
③山地帯での課題
17:35～18:00 分科会報告
19:30～21:30 夕食・懇親会

◆ 7月10日（月） フィールドスタディ（小雨決行）

8:00～14:00 伊吹山(1377.3m) 自然観察会

（十八楼→伊吹山→JR大垣駅→JR岐阜駅）

講師：清水政美氏

《基調講演》

「伊吹山の外来植物」

講師 清水政美 氏



講師プロフィール

昭和22年8月6日 静岡県掛川市生まれ

東京理科大学理学部化学科 卒業

▽職歴…日産化学(株) 中央研究所、財団法人
東海技術センター勤務を経て、現在は一般財団
法人自然学総合研究所 主任研究員

22歳〜30歳…水質、大気質等の公害物質の分
析に従事、31歳〜 動植物を主とした自然環境
調査、自然保護対策等に従事

▽ 現在携わっている環境関連の仕事

(1)JRRニア関係の自然保護対策

・保全対策の必要な植物の移植および移植後の
モニタリング

・残土置き場の選定に対する保全対策の提案

(2)某町の工業団地造成に関わる自然環境調査
(3)某株式会社の子会社で地埋立て地の自然環境調査
▽委員会等

(1)岐阜県環境影響評価審議委員会

(2)設楽ダム湿地検討委員会

(3)岐阜県自然工法管理士講習会講師

「信長時代からの移入」

伊吹山は、滋賀県と岐阜県にまたがる伊吹山
地の標高1377mの主峰で、滋賀県側は琵琶
湖国定公園、岐阜県側は伊吹県立自然公園に指
定されています。日本海側の若狭湾と太平洋側
の伊勢湾を結ぶ最も狭い地域で、山頂の年平均
気温は6.1℃、北海道の稚内とほぼ同じです。ま
た年中10m/s程の風速が観測される地域で
もあります。このため、標高が低いのに亜高山
性の植物や高山性の植物が平地帯の植物と共に
生育するほか、石灰岩層でできた山であること
から、独特な植物環境を形成しています。伊吹
山には約1300種の植物が生育しているとい
われており、山頂付近のお花畑は山野草の宝庫、
山頂は滋賀県の最高峰(百名山の1つ)で、展
望もよいことから毎年多くの観光客で賑わって
います。1965年(昭和40年)7月には伊吹
山ドライブウェイが開通し、多くの登山客が押
し寄せる一大観光地となっています。このため、

人の出入りに伴う外来種の侵入や踏みつけによ
る植生の後退や衰退が問題となっています。

伊吹山と人の関わりは古く、古事記(712年)
には日本武尊(ヤマトタケルノミコト)伝説が、
延喜式(927年)、醍醐天皇の頃には伊吹山で
採取されたと思われる薬草の記事が、後拾遺集
(1086年)や新古今集(1205年)には
ヨモギを材料とする伊吹艾の記述がみられます。
また、1568年に織田信長がポルトガルの宣
教師に、伊吹山で薬草を栽培することを許可し、
約3000種の薬草が移植されたことと伝えられて
います。また、江戸時代には伊吹山で採取され
た薬草が幕府への献上品となっていました。

このようなことから、伊吹山に持ち込まれた
(侵入した)と思われる外来植物の歴史は古く
現在も多くの外来種が確認されていると同時に、
在来種への影響が少なからず生じています。こ
のため、「伊吹山を守る会」や「伊吹山自然再生
協議会」、「伊吹山ネイチャーネットワーク」、「伊
吹山もりびとの会」など多くの人たちによって
伊吹山の保全が図られています。

今回、岐阜県で開催される2017年「JAC
C自然保護全国集会」における講演では、当地
域を代表する伊吹山の植生と外来種による植生
への影響について問題提起をしたいと考えてお
ります。

《分科会》

① 高山帯での課題

標高2500m以上で

問題となっている現状と課題

担当…西條好迪 氏

② 亜高山帯での課題

標高1500m以上で

問題となっている現状と課題

担当…下野綾子 氏

③ 山地帯での課題

標高500m以上で

問題となっている現状と課題

担当…清水政美 氏



分科会担当者プロフィール

■西條好迪(さいじょう よしみち)

神奈川県生まれ。東京農工大学大学院修了後、東京農工大学、東京教育大学、関東学院大学、岐阜大学等で研究・教育活動。現在、(一財)自然学総合研究所 理事。農学博士(九州大学)。

(公社)日本山岳会岐阜支部自然保護委員(JAC1891)、農林水産省中部森林管理局保護林モニタリング検討委員会委員、国土交通省中部地方整備局中部地方ダム等管理フォローアップ委員、環境省希少野生動物種保護推進員、岐阜県都市計画審議会環境部会委員、等。

植生管理学・植物生態学・森林植物学・草地学をとおして、竹林拡大に資する生態戦略の解明のための試験研究、高山植物群落および亜高山帯針葉樹林、山地帯落葉広葉樹林にて、植生遷移と構成種群の動態解明に関するモニタリング調査研究、緑化工

施行地における植生の回復様式や、稀少植物移植地等における対象種の動向に関するモニタリング調査を実施している。



■清水政美(しみず まさみ)

※プロフィールは前ページ参照

■ 下野綾子（しもの あやこ）



・ 20010年4月～2015年3月
筑波大学生命環境系生物圏資源科学専攻
遺伝子実験センター 助教

・ 2015年4月～

東邦大学理学部生物学科講師

〈著書〉

・ 下野綾子. (2013) 新たな植物育種技術で作製された植物の規制と生物多様性影響評価. In 新しい植物育種技術を理解しよう - NBT (new breeding technology) -, pp. 99-109 国際文献社、東京

・ 下野綾子、下野嘉子. (2008) 高山における埋土種子動態と発芽戦略. In 遷移の自然史―「空き地」の植物生態学、pp. 153-173 北海道大学出版会、札幌

・ 下野綾子 (2013) 写真が語る山の自然

・ 今・昔、岳人、東京新聞社、東京

94-97.

〈研究職歴〉

・ 2005年3月 博士（農学）取得

・ 2005年4月～2005年7月

東京大学大学院 農学生命科学研究科

研究拠点形成特任研究員

・ 2005年8月～2009年3月

独立行政法人国立環境研究所

NIESポスドクフェロー

・ 2009年4月～2010年3月

Postdoctoral fellow at Umea University

ヒメジョオン



<写真提供：清水政美氏>



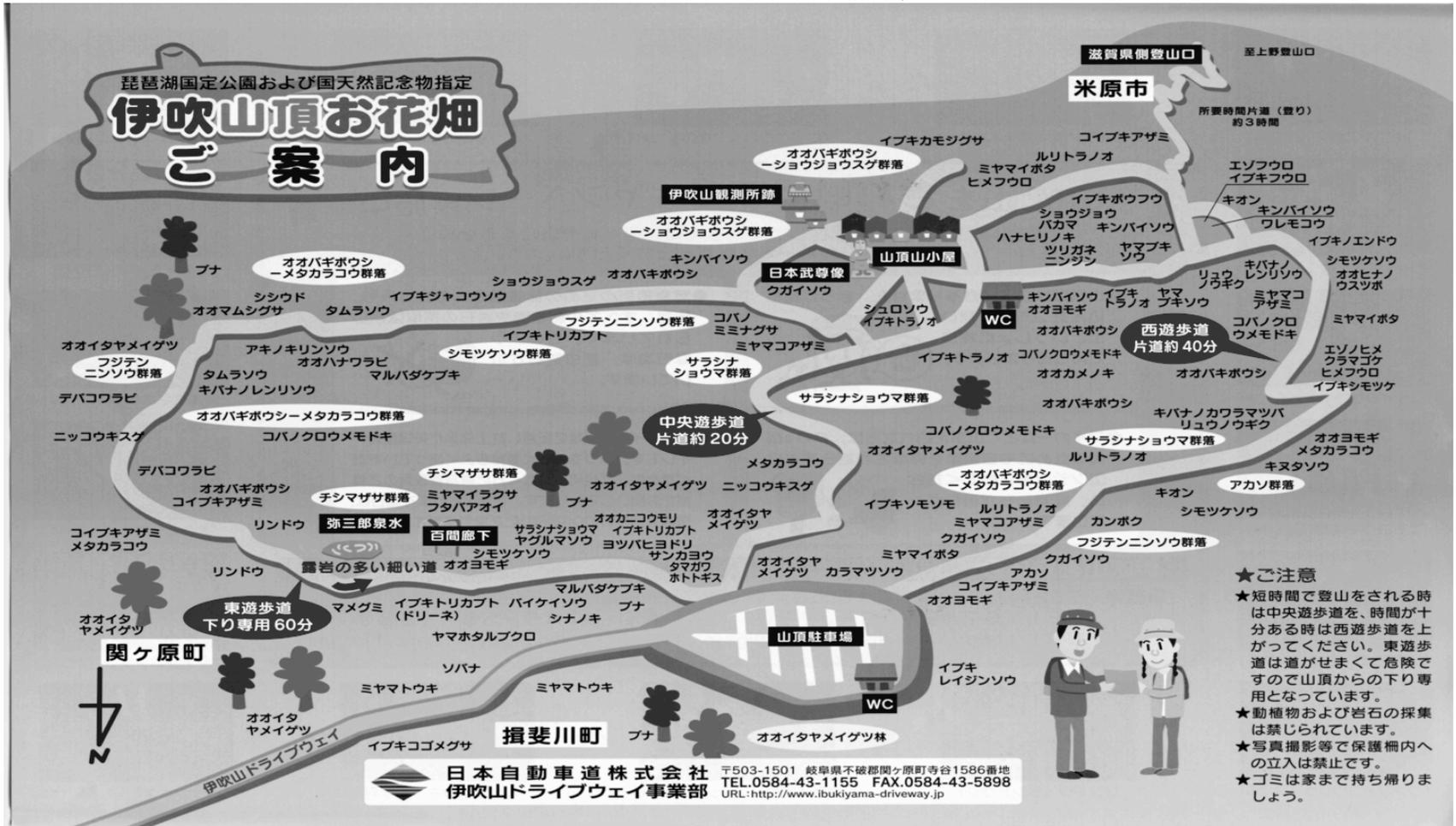
キバナノレンリソウ

セイヨウタンポポ



《フィールドスタディコース案内》

※日本自動車道株式会社伊吹山ドライブウェイ様の許可を得て掲載しています



駐車場から西登山道コースを経て頂上に、中央の歩道を経て駐車場に戻ります。

行きは1時間強、上で1時間休憩(昼食)、帰りは30分程度です。

《支部報告》

■北海道支部 藤木 俊三

① 大雪山高山植物盗掘防止

パトロール

北海道環境生活部の委託で支部の公益事業として実施している大雪山国立公園内の一般登山道周辺での監視活動。2016年度は支部の会員と会友29名を事前にパトロール員として登録し、5月20日(金)に説明会を兼ねた自然保護研修会を札幌で開催した。パトロールの期間は6月1日～10月10日までで高山植物の盗掘などの違法活動の監視のほかエゾシカやセイヨウオオマルハナバチの目撃情報も報告。昨年度は29名中24名の会員と会友で延べ104回のパトロールを実施した。2017年度も32名のパトロール員を登録し5月19日に研修会を開催し6月1日～10月10日に75回以上の監視活動を実施予定。

② 支笏湖復興の森づくり

2004年9月に北海道を襲った台風

18号で壊滅的な倒木被害を受けた7000ヘクタールに及ぶ国有林を再生しようというプロジェクトで2006年から企業や団体が植林を開始。北海道支部は2007年にアカエゾマツの植林に参加し、毎年初夏に下草刈り、秋に伸長量調査を実施。2016年は6月18日(土)に会員5名で下草刈り、10月14日(金)伸長量調査を実施した。2017年は植林から10年がたち植林した樹木がおおむね順調に成長しているため下草刈りは実施せず、森の観察会を6月26日(月)に実施、秋も調査はせず観察会の予定。

③ 美瑛富士避難小屋

携帯トイレブース点検・清掃活動

十勝連峰美瑛富士には無人の避難小屋が設置されているものの常設のトイレがなく汚物やテッシュペーパーによる周辺の汚染が問題化。2015年から夏山期間中、環境省がテント式の携帯トイレブースを小屋の脇に設置しその管理を北海道内の山岳関係9団体がおおむね1～2週間おきに持ち回りで実施することとなり、北海道支部も活動に参加。

2016年は8月2日(火)～3日(水)に会員と会友の計3名で実施した。2017年は9月17日(日)に会員と会友4～5名で活動予定。

■青森支部 江利山 寛知

世界自然遺産白神山地におけるブナ林再生事業と観察会は今年度も春6月、秋9月の2回実施される予定です。赤石川上流の櫛石山に続く奥赤石川林道周辺地域のバッファゾーンで植林されたブナ幼木の育成のための下刈りなどが主な作業になります。最近、白神山地の周辺でもニホンジカの

進出が確認されていて行政関係でも問題になり新聞などマスコミでも取り上げられるようになりました。今まで、北の青森では身近な事として感じられなかった事態なので少し不安に思っています。白神山地に入るアクセス道としての白神ラインはここ数年、自然災害のために通行止めとなる期間が多かったのですが、今シーズンには開通の日から順調に利用できていますので、ぜひ白神山地を訪れて頂きたいとおもいます。

■岩手支部

阿部 裕二

昨年度から自然保護委員となりました岩手支部の阿部裕二です。よろしくお願ひします。

さて、昨年度岩手支部では、毎月の例会山行を、それぞれ登山振興（公募登山、清掃登山）、調査研究（自然鑑賞会）、環境保全（山岳パトロール）に重点を置き実施しました。

また、岩手山八合目非難小屋管理当番の分担も行っております。

今のところ岩手県内の山は、めったにゴミも落ちてはおらずきれいで、登山マナーも良好で、岩手支部として早急に取り組むべき大きな課題、問題点は特にありません。

今年度も岩手支部では、毎月の例会山行を、それぞれ登山振興（公募登山、清掃登山）、調査研究（自然鑑賞会）、環境保全

（山岳パトロール）

に重点を置き実施する予定です。



■宮城支部

柴崎 徹

1. 山岳の放射線量調査について

私たちの支部が行ってきた放射線量調査と『山岳』への記事に対し、多くの方々から貴重なご意見と励ましをいただき、有難たく思っている。この四月から立入りが可能になった地域の放射線量調査に加え、現在、次のような視点から検討を進めている。

- ① これまでの宮城と阿武隈山地での二つの調査から、今回の事故による放射能汚染の影響範囲をどのように捉えたらよいか、具体的に特定できないか。
- ② 私たち以外の調査データを活用して、その比較から経時的線量の変化を追えないか。
- ③ 同じ山でも、地形や標高の異なるそれぞれの位置において、放射性物質はどのような挙動を示していくのか。

これらは、いずれも私たちには重い課題であるが、今後検討して行きたいと思っている。

2. 震災復旧復興事業と里山

津波により大きな被害を受けた沿岸地域では、復旧復興事業として、一段高い防潮堤の新設、被災した旧市街地の盛土嵩上げ、高台への移転にともなう新市街地造成などが進められ、そのための大量の土石の採掘と丘陵地の大規模な開発が行われた結果、削られたり失われたりする山々が随所に見られ、里山の地形と景観に大きな影響を及ぼしている。

震災後六年、復興事業の最終年となっているこの時期、大震災によるもうひとつの影響として、里山が受けたこれらの改変についても事実を正確に記録していきたいと思っている。

■福島支部

高田 雅雄

「ニホンジカの被害と現状」

ニホンジカの食害問題について自然保護委員会で取り上げられてから10年近くになり今年の3月11日第一回の山岳自然環境セミナーが開催され、私も参加しました。色々なお話を聞き今後の対応、対策について行政と取り組みをしたいと思いまし

た。以前、尾瀬日光のシカによる食害、生態系への被害が多く聞かれてきました。現在これらのシカが北上し、那須山系や南会津の山で多く見られるようになり、森林の樹皮剥ぎや植林地の食害が確認されています。

森林内へセンサーカメラを取り付けてみました。メスシカが数頭と角の立派なオスのシカが映っていました。近隣の牧場では数十頭のシカが目撃されています。

昨年より30頭以上が捕獲されていますが焼け石に水の様です。震災原発事故以来イノシシの増加も見られ対応に追われている状況で、イノシシは指定管理鳥獣で狩猟がされていますが、シカについては指定申請をしているところで現在許可待ちの状態です。これらの鳥獣を狩猟しても線量が高く食用にはならないので焼却処分、しかし焼却設備の不備で運搬や解体等の手間がかかり収入になりません。最近ではクマが人里まで現れるようになり、狩猟者の高齢化少数のため、動物にふりまわされている状況です。

野生動物が人間の生活圏まで入り込むのは、人間が山より生活の便利な街に住む様

になり、動物達が里山での警戒心が希薄になって住み分けが無くなったのでしょうか。

■群馬支部

北原 秀介

群馬支部は、本年7月で設立4年となりました。支部会員も40名と設立当時の2倍となり、緩やかではありますが、JAC支部としての活動も軌道にのってきたと言えるでしょう。

群馬県は日本山岳会、日本山岳・スポーツクライミング協会(旧日本山岳協会)、勤労者山岳連盟の3団体が一緒になり、県山岳団体連絡協議会を組織し、山岳イベントを共同で行っております。昨年は、「山の日」が制定され祝日となったことから谷川岳を中心に多くのイベントを行い、群馬支部自然保護委員会は「家族で谷川岳ウォッチング自然観察会」を主催しました。本年も「山の日」には同様の自然観察会を行います。群馬県では、昨年から「ぐんま県境稜線トレイル」と称して、谷川岳から四阿山南の鳥居峠まで100kmの調査と整備を開始しました。これも3団体が協力して自然環境の破壊に至らないか否かを含めて調査を行っ

ております。

本年2月には、群馬支部が主催支部となつて「四支部合同懇談会(群馬・栃木・茨城・千葉)」を上毛三山の一峰である妙義山を目前にする妙義グリーンホテルで開催しました。四支部の活動報告の他、群馬県出身で日本山岳会三代会長の木暮理太郎について研究者による講演、さらに群馬支部会員で日本山岳・スポーツクライミング協会



長の八木原圀明氏から「群馬のヒマラヤ登山」の公演がありました。翌日には西上州富岡アルプスとも称される神成山九連峰（最高地点320・9m）を自然観察の傍ら、のどかに縦走しました。

本年5月には、赤城山北面の船ヶ鼻山をフィールドに清掃登山を兼ねて自然観察会を群馬岳連と一緒に実施いたします。

ゆつくりではありませんが、支部としての活動を順調に進めていることをご報告いたします。

■埼玉支部 高嶋 徳紘

「年間計画の実施済み案件」

(1) 2017年4月9日(日) 社会貢献委員会主催の「障害者ふれあい登山」の支援活動が、飯能市郊外の天覧山・多峯主山・飯能河原で総勢92名、内、支援者(JAC 埼玉支部30名、自然保護委員10名)で実施、全員完登した。

(2) 2017年4月29日～30日「第3回森づくり体験研修会」が、八王子市の高尾グリーンセンター(国有林)で1泊2日で自

然保護委員会を含め15名で実施した。実習の目的は、埼玉県内で実施する森づくりのための間伐、除伐、下刈のための鋸、鉋、クワ、チェーンソーの使用方法と使用後のメンテナンスを学ぶために毎年実施される。午後は、作業道造り。稜線に沿って上りと下りが2班体制で幅1m長さ150mの作業道造りを実施し、次回間伐作業に備えた。

(3) 2017年5月6日(日)「第5回大高取山自然観察会」の事前踏査を、実行委員8名で実施した。一般公募を含め多数の参加が見込まれるため、コース上の問題点を念入りにピックアップ、万一に備えるロープ張り現場などを特定した。

(4) 2017年5月14日(日) 本番実施。参加者42名中に本部 川口章子委員長をはじめ常連の東京多摩支部自然保護委員長 河野悠二氏、日山協からの参加者、教育委員会からの参加もあり、地元テレビ局の取材もあり、一日、地学、植物学、史学などを学び、参加者からは、地元越生町町長からの「越生の自然」500頁の図書のプレゼントに驚きを隠せなかった。

■千葉支部 鈴木 美代

千葉支部の活動は、まず自然を知ろう、をキーワードに、自然観察会、講演会を中心にやってきた。これまで、房総の内陸サングヤ、千葉県指定の天然記念物など、千葉県内を中心に観察会を行っていたが、28年度は、千葉県を飛び出し、支部会員の小疇尚明治大学名誉教授の案内で、谷川岳の氷河地形の観察会を行った。大変好評であり、見学会における案内者の重要性を再認識した。山の少ない千葉支部としては、良い案内者が得られるならば、広く近県に目を向けてゆくべきかもしれないと考えている。

千葉支部の属するエリアは、温暖な気候となだらかな地形により古くから多くの人々が生活しており、現生の自然というものは、ほとんどと言っていい程存在しない。しかし、千葉には豊かな里山があり、これはこれで広い意味での貴重な自然、と呼べると考える。千葉県内での活動としては、こういった、里山の自然観察を公益事業として展開できないかと考えている。そのためには案内者の充実が欠かせない。

近年取り組んできた「自然保護の委員会化」は、ようやく全3名体制となった。上記のような構想実現のために、より多くの会員の参加を期待している。

■東京多摩支部 河野 悠二

東京多摩支部・自然保護委員会の委員は担当幹事1名を含め23名(男性16名、女性7名)である。

主な活動内容は次の通りである。

☆他団体との協力、参加活動

▽都岳連・自然保護委員会の御前山カタクリパトロール参加…4月中下旬の約5日間(保護柵の設置、頂上でのトイレテント設置と携帯トイレ販売、カタクリ保護の啓蒙活動・冊子配布)。

2017年からは「カタクリ群落の分布調査」の自然保護指導員向け調査に変更され、委員内の自然保護指導員同行での調査参加し分布調査ワークシート提出。

▽都レンジャー(サポートレンジャーを含む)との協働作業

雲取山石尾根登山道整備(石積みで登山道の複線化防止による植生保護、2016年6月2日・3日(1泊2日)、4名参加)

▽全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」に参加(多摩川と秋川の合流地点3ヶ所を実施。2016年6月6日、5名参加)

☆ボランティア活動

▽アツモリソウ保護活動(三ツ峠山除草作業、2016年6月22日・23日(1泊2日)、12名参加)

▽国立市立第四小学校、高尾山ハイキングに協力・支援(2016年10月2日、児童・関係者36名参加)

☆観察会などの実施

▽御岳山レンゲショウマ観察会(毎年8月、一般募集/会員向け、2016年8月23日、一般参加者19名)

▽高尾山シモバシラ観察会(毎年12月、一般募集/会員向け、2016年12月26日、会員参加者13名、2017年1月6日、一般参加者24名)

▽親子自然体験(2016年10月8日、一般参加者4家族10名参加、自然観察、ピザ作り、弓矢作りなど)

☆自然保護講演会

▽自然保護に関する講演会を開催(毎年11月頃に実施、2016年11月4日、一般・会員参加者28名)

☆自然保護委員会

▽月1回委員会を開催(第2木曜日)

■富山支部 河合 義則

富山支部における自然保護活動については、昨年と活動内容について大きな変化はありませんが、今年は、2014・2016年まで富山県が実施した「立山弥陀ヶ原・大日平学術調査」が終了しその報告書が出されました。富山支部の会員も複数参加しており、富山県の自然系学術調査にも大いに貢献しています。調査範囲はラムサール条約登録湿地学術調査として立山弥陀ヶ原・大日平・称名川上の廊下の踏査等多岐にわたっています。地学部門、生物部門、環境部門、遊歩道部門、記録部門と分担して調査を行いました。

称名川上の廊下には一か所だけ峡谷を下った先にワイヤーロープによる吊り橋が架

けられていて、弥陀ヶ原と大日平の通行が可能だったのですが、昭和44年の水害により流出破壊されてしまい以降は廃道になっていました。今回その箇所も確認したとのことです。称名峡谷上の廊下の調査は50年ぶりの調査となりました。

弥陀ヶ原では、7300年前の硫黄島の鬼界カルデラの噴火による火山灰(アカホヤ)の確認もされています。

立山は未だに、確認されていない場所がいくつかあり今後調査の進展とともに富山支部会員への要請がかかることが予想されるため、対応できるように研鑽を深めて行こうと考えています。

このように、各団体の活動に積極的に講師やリーダーとして要請を受けて活動するという事例が多くて、残念ながら富山支部の主催する独自の自然保護活動までなかなかできていないという状況があります。

富山支部は、富山県における多岐にわたる自然関連行事に人材を派遣しているという性格がよく、支部独自の自然保護活動の単独実施が難しいが、各山行の中で、自然を知りその変化を察知し、どのような対応が必要かの経験からの意識醸成は確実に

高まっています。

ライチョウの低地飼育については平成28年度の孵化と雛の成長が順調ということで、現地での採卵は行わず低地飼育で育った個体の繁殖を試みる予定で5月20日に初めて低地飼育個体の産卵が確認されました。今後の動向に注目していきたいと思っています。

■ 石川支部

■ 埴崎 滋

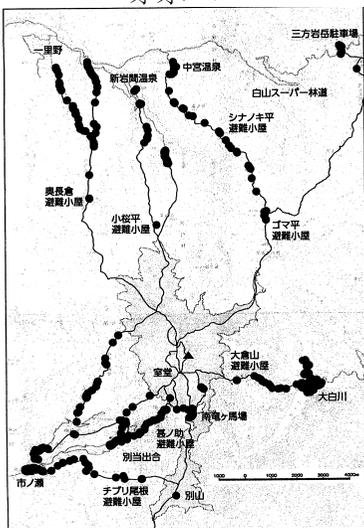
当地、白山は2017年に、渡来人の子とされる越前の僧泰澄が開山して1300年の節目を迎える。奈良・平安時代より「北に遠ざかりて雪白き山あり」と都人の憧れと崇敬の対象でもあった。40万年前の火山活動から歴史時代までの活動記録を持つ唯一の火山であり、350年前の活動から300〜400年周期とされる活火山としても、日本列島で高山帯を有する最西端の独立峰としても、今脚光を浴びている。

国定を経て60年の国立公園の総面積は49900haの内、原生自然が残っている特別保護地区が全体の37%を占め、生息の高山植物は約250種で、その内の100

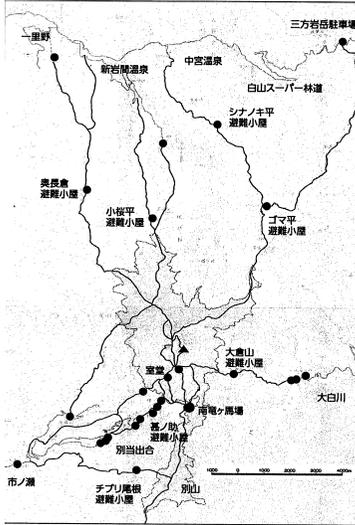
種超が列島分布の西限である。ハクサン(ゴゼン)を冠した高山植物も約30種存在する。

石川県立の機関である「白山自然保護センター」は昭和48年の蛇谷観察園に始まり、現在は白山市木滑の本庁舎と中宮温泉ビジターセンター・ブナオ山観察舎・市の瀬ビジャーセンター・白山国立公園センターのオペレーションで普及啓発・保護管理・調査研究を進め、その研究成果は権威のあるデータとして学会にも広く知られているところでもある。白山に於ける外来植物の分布パターンは多彩で、代表的なオオバコ、フキ、スズメノカタビラ、シロツメクサの分布は次図の通りであり、

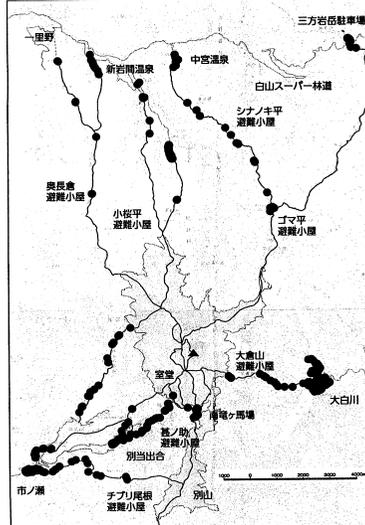
オオバコ



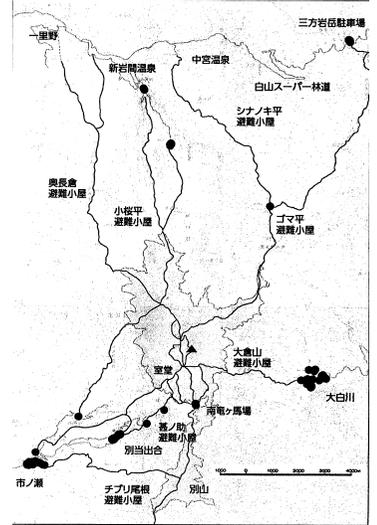
スズメノカタビラ



フキ



シロツメクサ



広域でノコンギク、局所分布でセイヨウタンポポ（南竜ケ馬場・室堂）、ムラサキツメクサ（中飯場・旧甚の助小屋付近）、エゾノギシギシ（南竜ケ馬場・延命水付近）、オノエヤナギ（南竜ケ馬場・室堂など）、アカミタンポポ（室堂）、クサイ（南竜ケ馬場）、オオアワガエリ（南竜ケ馬場）、カモガヤ（南竜ケ馬場）、スギナ（南竜ケ馬場）が植生する。一部で、確認されているコマクサは愛好家グループが持ち込み、昭和48年に植栽されたもので、白山では外来植物である。白山での本格的な外来植物対策は平成13年度からで、ボランティアによる除去が開始され、現在も一般募集を併せて、室堂ではスズメノカタビラを中心に、南竜ケ馬場では、特にオオバコに重点を置き、この二種については土壌保全のため、地上部分のみを切除する方式でオオバコは地表面下の芽を出す生長点を切除。スズメノカタビラは越年草であり、地上部の切り取りで、次年の芽出しを止める。成果はここ9年でオオバコ550 kg、テアテアスズメノカタビラ93 kg、シロツメクサ2・5 kg、アカミタンポポ7・3 kgである。これとは別に、登山口の市ノ瀬では5年でオオバコ375・

4 kgを切除している。登山道上ではオオバコの花茎のみを講習受講の登録ボランティアが切除している。登山者の主たる駐車場のある別当出合でもオオバコ生育と種子着用の登山を防ぐ目的からもアスファルト舗装が環境省によってなされた。全国的な「種子除去マット」設置に併せて白山でも13か所（平成24年）に増設置、「種子除去ブラシ」も別山チブリ尾根小屋、砂防新道甚の助小屋、美濃禅定道三ノ峰小屋の三か所に設置している。有料の白山スーパ-林道でも「特定外来植物」のオオハンゴンソウが分布しており、在来のイワギク（いしかわレッドデューブク（2010）で準絶滅危惧、環境省のレッドリストで絶滅危惧二種に指定）の近縁の外来植物のフランスギクが分布。オオハンゴンソウは抜き取り（115・4 kg実績）、フランスギクは花茎の切除（2900本実績）の実施成果を積み上げている。オオハンゴンソウは除去減となっており、フランスギクは完全除去に向けて除草シート設置で経過観察としている。5月1日からの春山開きに合わせて、メイン登路の砂防新道の別当吊り橋の横板はゴールデンウィーク直前に復帰され、室堂

利用も6月末日までは食事なしであり、未

だ一ノ瀬からの車道歩きが2時間で、近々での別当出合への開通が予定されている。

金沢市郊外の住居からは後立山連峰から北アの劔・立山・薬師・槍・穂高の遠望とともに亜高山帯の大門山の北面残雪のピラミッドピークから徐々に高度を上げ、白山の御前峰に続く純白の山系がゴールデンウィーク後も秀麗に望める。

環境省の提唱する「外来生物被害予防三原則」の1、入れない。2、捨てない。3、拡げない。(侵略的外来生物による被害を予防するために)で、そのロケーションに合致させた具体的方策を追及することが、究極のテーマであるのは論を俟たないとする。引用は「白山自然保護センター」発行の(白山の外来植物Ⅱ2013・3)に依る。5月9日に訪所した村中次長、平松研究員との面談内容も記した。時時刻々と変わる現地の情報は取り付き車道の状況も含めURL=白山自然保護センターで検索を乞う。



■信濃支部 財津 達弥

平成28年度は、第70回ウエストン祭を第1回山の日記念全国大会の関連事業として位置付け開催。事前に行政機関と共に徳本峠登山の状況調査や整備を行った。中部ブロック交流会に合わせ、御嶽山火山災害についての講演会講師：信州大学竹下欣宏准教授を御嶽山麓の木曾町で開催した。以下は、文献に基づき長野県の帰化植物等の状況を紹介する。

めている。

また横内氏は外来植物の被害を防ぐため、「①入れない、②捨てない、③広げない」、「ブラックスリストの帰化植物は、見つけ次第抜き取る(人海作戦)」「(犀川の外来植物の変遷)日本・長野県の帰化植物」(前述)必要があると記している。

『しなの帰化植物図鑑』(信濃毎日新聞、2007年)の著者で横内文人氏は、『犀川の外来植物の変遷)日本・長野県の帰化植物』(川と文化研究所研究収録、第7号、2016年)に、2015年3月1日現在の長野県の帰化植物は483種類、長野県の帰化率は7・1%と記録している。また渡来年代別にみると、江戸時代より前が35種、江戸時代が47種、明治が123種、大正が30種、昭和の戦前が63種、昭和の戦後が105種、平成が7種で、「明治期の渡来種数が最も多く、日本の政治の明治と、植物の世界でも明治維新であった」とまと

中部山岳国立公園の上高地園内に侵入した外来植物の詳細な分布を明らかにするため、信州大学農学部 渡邊修氏、環境省松本自然環境事務所の松尾野里子氏、中部山岳国立公園上高地パークボランティアの根橋信水氏らが実施した2012年の調査では、「エゾノギギシ、ヒメジョオン、シロツメクサ、ムラサキツメクサ、外来タンポポ种群、オランダミミナグサ、カモガヤ」など39種の分布が確認されている。(G.P.S簡易調査による上高地地域の外来植物の分布と解析)信州大学農学部紀要49:19-27(2013) 長野県の山岳自然保護の話題としては、ニホンジカのように「在来生物であるが、個体数や分布域が拡大し生態系に悪影響を及ぼしている生物」の高山帯の進出の問題が深刻である。環境保全研究所の堀田昌信氏の2015年調査では、北アルプ

ス後立山連峰の高山帯でイノシシが初確認されている。(北アルプス後立山連峰爺ヶ岳及び岩小屋沢岳周辺の高山帯でのセンサーカメラによるイノシシ初確認とニホンジカの確認状況」長野県環境保全研究所研究報告 12:51-54 2016) 外来植物同様、侵入状況や高山植生への影響を把握するため、調査の継続が必要である。

■岐阜支部

藤田 純江

岐阜支部の委員会活動は、地域の他団体との協働による公益的活動が中心になっている。

その一が、県林政部との協働による「私たち県民の森林(もり)づくり」である。哺乳動物や昆虫の食害で衰退の危機に貧している落葉広葉樹林(ブナ・ミズナラ林)の回復を期しての「小津権現山山麓」(揖斐川町)の森林再生事業であり、手がけてから12年になる。ここでは、地域に自生する樹種の稚樹を植栽するとともに、若干の下刈りやニホンシカ・イノシシの食害防止のため防鹿網の設置等を実施している。この事業は、国土緑化推進機構の補助金を得て

開始したが、公益財団法人オイスカの支援や地元企業との連携も受けた。現在では、年15〜20回程度の現地作業として、植栽樹の生育調査(モニタリング)、野外観察会、登山道の補修・整備を行っている。

その二が、地域の自然環境を理解することで、より、登山を楽しめるように自然観察会を開催している。郡上市美並の「鶴形山」では、岐阜県南限とされる常緑広葉樹(照葉樹)群の観察を行い恵那・瑞浪の「黒の田」では、美濃三河地域の固有の湿地に生育する植物の観察と湿地の維持に欠かせない湧水との関係を、下呂市の「御前山」では、サシバ・ノスリ・ハチクマ等の猛禽類の渡りを、それぞれ学んだ。

その三が、地域の各団体と共同で実施する活動で、夜叉ヶ池ボランティアパトロール(中部森林管理局岐阜森林管理署)、イビデンの森植林事業(イビデン株式会社)、金華山登山道整備(岐阜市)、市民登山(各種地域団体)他があげられる。

■静岡支部

白鳥 勝治

静岡の南アルプスと、

その自然保護について

静岡県の最北端に位置する間ノ岳は、山梨県との境にある静岡市内の最も高い山で、近年地図上の標高表示が3190mに変わり、国内第3位の山になった。しかし、間ノ岳を含む赤石山脈は、日本の周辺に4つある地球表層上のプレート活動の衝突によって、毎年4.5〜6.0mm程度高くなっている、まだ高くなる可能性があると言われている。

間ノ岳を源とする大井川は、静岡県内に降った雨のみを流す長さ168kmの一級河川で駿河湾に注いでいる。そして、この川を中心にして、東に富士川、西に天竜川と、いずれも静岡県内に河口がある三本の一級河川の源流が南アルプスの山々を形成している。

南アルプスは、昭和39年国立公園になるまで、静岡から入山する人は少なく、市内にある赤石岳の他、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳、悪沢岳、荒川岳、聖岳などは、隣県の山梨県早川町や、長野県大鹿村、飯田市か

ら入山する人が多かった。

現在、夏山シーズンには定期バスがJR静岡駅から大日峠を越え井川ダムを経て畑薙ダムまで、約80kmの県道を運行している。畑薙ダムがある沼平から上流の二軒小屋までの約25kmは静岡市の林道で一般車の通行は制限されている。

静岡市域にある、南アルプスの3000m以上10座の山々は、明治28年、その殆どの約25000haを大倉喜八郎に買収され、原生林は大規模に伐採された。

切り取られた樹木は、大井川の谷間に丸太で組み立てられた堰(鉄砲)へ貯められ、堰を切った鉄砲水の力によって、幾日もかけて下流の島田まで運ばれ、紙原料のパルプや木材として利用された。

そのような事があつてか、静岡県内の南アルプス国立公園指定面積は、多くの高山を擁しているのにも拘わらず、総面積35752haの内、3387haと10%に満たない。

現在、静岡の南アルプスの自然保護について、静岡県及び静岡市は、環境省と共にボランティアの支援を得て、毎年高山植物の保護策として防鹿柵の設置・保全を行っ

ている。柵内の高山植物は食べられていたニッコウキスゲの花の復活など保護効果は見られるが、まだ満足できる状態には至っていないと思う。

又、ハイマツと共に世界の南限と言われているライチョウの保護については、静岡市が民間が行ってきた保護活動を支援することに着手したところである。

今、静岡では、平成14年JR東海が発表したリニア新幹線工事で「大井川源流域で毎秒2トンの減水が想定される」ことや、源流域の二軒小屋付近で2ヶ所に開けられる非常口?から排出される「360万 m^3 のトンネル掘削土を源流域に積み上げる」ときが、大井川の渓谷や河川の自然破壊ばかりではなく、下流域住民の生活や産業の支障となるのではないかと危惧し、今年4月末現在、静岡県、静岡市及び流城市町は工事開始を認可していない。4月上旬、JR東海の柘植社長は静岡における着工の時期は「用地取得に向け地権者らと話を進めているところ。いつ開始できるかを申し上げる段階にない」と言っている。

4月下旬、長野県大鹿村では、リニア新幹線工事が開始された。

静岡支部は2014年の秋、静岡県山岳連盟、静岡県勤労者山岳連盟、静岡市山岳連盟へこの問題を提起し、山岳四団体連名で、静岡県知事と静岡市長を通じてJR東海へ、リニア新幹線トンネル工事による「大井川源流域の毎秒2 m^3 の流水減少」及び「源流域の渓谷へ排出する360万 m^3 の掘削土の排出」が南アルプスの自然破壊に繋がることを危惧し、これをさせない様に申し入れた。

この問題について先が見えないため、今後の南アルプスの自然保護対策として、静岡県の南アルプス国立公園域を拡大する案を検討し始めている次第である。

■東海支部

井藤 恵美子

東海支部は委員数21名でありその内の半数が月1回のルームでの会議や観察会等に参加をしている。2016年度は最終回となった森の勉強会9名、自然保護全国集会へ7名、大鹿村自然観察山行へ12名がそれぞれ参加した。猿投の森の調査山行は7回実施した。ニホンシカの被害が大となっているが猿投の森の赤外線調査によればカ

メラに写ったニホンジカの頭数は、2015年10頭、2016年12頭である。隣接する海上の森では同じく赤外線カメラで2014年度に5頭を捉えている。猿投の森第1次協定区Cゾーンには約30本のヤマザクラがある。2006年の調査から10年が経過しているので調査を試みた。対象木は29本であったが10年の歳月のため4本は場所等が不明となり調査不可能。こんかいは、直径70cm以上を2006年度の調査値と比較した。

また、10月19日・20日は田原市渥美町、泉福寺で照葉樹林帯下部のスタジイ林の見学。愛知県自然環境地域指定地区の「吉祥山」の観察会などを予定している。

自然保護活動は「まずは知ること」であると思う。私たちの生活を支えている自然

木番号	3	5	6	7	10	11	13	14	19	24	27
2006年度	95	103	76	67	97	90	127	113	97	110	68
2016年度	98	110	83	70	104	101	137	114	110	110	75

というものをよく考え、知るために東海支部は観察山行を続けたいと考える。

■京都滋賀支部 山村 孝夫

もう10年くらい前になると思います。ある日山を歩いているとクマザサ（チマキザサと根曲りタケのとれるチシマザサ）に花が咲いていたり、実（稲穂みたいな）が付いていたりしました。50年くらい前、山の先人からクマザサに花が咲いたり実がなると、それらは枯れてしまうと教えられていました。そんなことは完全に忘れていました。そしてその時に花や実に出会って、

本当に枯れてしまうのかなと思っていました。その後2〜3年でどんどん枯れてゆきました。しかし枯れ残ったササのフシから新芽が出ているものがありましたので、やれやれ、これで2〜3年もすれば回復するかなと期待しましたが、その希少な新芽を鹿が食べてしまい、その後完全に死滅状態になりました。そして藪コギは楽になりましたが、足下が崩れやすくなり危険ですし、雨や雪解け水で表土の流出も心配になっております。一方で藪が無くなり、陽

が差すようになったからか、ヤマシヤクヤク、ユズリハ、イワウチワ等が増えている処もあります。クマザサ等の移植は可能なのかどうか、知っている方がいらつしやれば教えて欲しいと思います。

支部の活動としては、比良山系で見つかったダンダ坊遺跡の整備や巨樹観察をしております。鹿の食害に関しては、入山した折に見ると樹皮をぐるっと一周食べられた木や草花への食みあとなどはよく見かけます。それらに対しては無策であります。今後自然から何か知る・学ぶということをしてゆきたいと思います。

■関西支部 斧田 一陽

関西支部の自然保護活動は前年に引き続き①森づくり（山岳自然環境保全含む）②やまみち巡視保全③大台ヶ原利用に関する協議会参画等を実施している。なお、森林観察会を兼ねて森づくり体験希望者を随時受け入れたが、自然観察会は雨天のため計画だおれとなった。

1. 森づくり活動

大阪府高槻市にある本山寺山国有林を社

会貢献の森協定により「日本山岳会関西支部の森」と名付けて、生物多様性豊かでやさやかながら温暖化防止に寄与する清々しい森林作りを目指して、作業活動主体の「本山寺山森林づくりの会」で月2回の定例作業を実施している。

森のシンボルとして大阪府下では貴重なモミ、ツガ、アカガシの冷温帯林の保全に努めている。ナラ枯れ防止に濡れタオルとビニールシート巻きで対策をしているが、枯れたのは数本なので効果があったと思われる。スギ、ヒノキの人工林の枝打ちや間伐後の森床整備で、清々しい森になっている。崩れた溪流地のこれ以上の崩落を防ぐため調査を実施し、これから防止作業にも取り組む計画をしている。

六甲山地の東お多福山草原では、9団体と関係機関で「東お多福山草原保全・再生研究会」を組織して協働活動を実施している。少しずつではあるが、ネザサ草原からススキ草原に移っているように思われる。刈払い面積を上げているので、展望もよくなり訪れる人も増えている。晩秋に刈り取ったススキは、公共施設のカヤ屋根の一部に利用されている。

2. やまみち巡視保全活動

上記の森づくり活動地のやまみちの巡視と水切りの保全整備を実施する。なお、東お多福山では当支部の担当で、全コースの歩道調査を実施した。今後の整備は関係機関とも協議して検討を続ける。

登山者が片手鋏を持参して、気になる水切り（溝）をちよつと整備すれば、登山道の保全になるので、実行される方が増えることを願いたいものである。

3. 大台ケ原の利用に関する協議会参画

近畿地方環境事務所が主導する会議に、構成員として参画している。西大台を含む大台ケ原地区では、今秋よりガイド制が導入されるので、ワイズユースの利用者の増加を期待したい。なお上記の東お多福山でも神戸県民局に協力して、研究会でガイド養成講座を開催している。

4. その他

自然観察会や森林体験会は、今後も続ける。支部エリアで外来植物問題が大きく取り上げられているところはないが、大峰山脈の観音峰の観音平で天川村が主導してジキタリスの除去を毎年実施しているので、一度参加することを検討したいと思ってい

る。

なお、関西支部自然保護委員会は、今年度は10名の委員で活動している。

■ 広島支部

前垣 壽男

平成29年度活動方針

平成29年4月に広島県・島根県を結ぶ国道180号線の県境に位置する大佐山（標高1069m、中央分水嶺）から西側一帯に高さ150mの風力発電の設置計画が発表され、地元、北広島町を始め住民、関係団体に説明会が開催され、北広島町あげて反対運動を起すこととなり、JAC広島支部としても、この山地は生物多様性、景観的にも西中国山地の重要な動植物の生息域でもあり、生態系に大きな影響を及ぼす懸念があることから、その運動に加わる事として当面の重要な事業として協力することとなった。

支部の活動としては従来通り、分水嶺新道の整備、ひろしま山の日県民の集い、8月11日国民の祝日としての「山の日」行事等参画協力する等事業を展開する。

平成28年度活動報告

1. JAC広島支部独自事業

中央分水嶺「聖別れ」(匹見ルート)

登山道整備 8月27日・28日

八幡湿原協議会参加 3月13日

霧ヶ谷湿原整備活動 4月17日、

6月4日・5日(ひろしま山の日)

高岳山道整備 9月10日・11日

2. NPO法人

西中国山地自然史研究会事業

北広島町千町原草刈り、

野焼き作業 8月6日、11月23日

3. 山の日関係 8月11日

講演会参加 JAC広島

4. 西条・山と水の環境機構関係

山のグラウンドワーク 3月13日、

4月23日、10月22日、11月19日

水のグラウンドワーク 7月30日

5. JAC自然保護全国集会

7月16日・17日

於…高知 牧野植物園



■四国支部

石川 慎吾

三嶺山城さおりが原に防鹿柵設置

さおりが原は三嶺山城でもっとも早くシカによる食害が顕在化した場所です。沢水が流れ込んで湿潤な環境が良く保たれており、サワグルミやトチノキなどが優占する溪畔林が発達しています。その林床には、絶滅危惧種のマネキグサやムカゴツヅリなどが生育しており、これらの貴重な林床の植物がシカによる強度の食害を受けて、まさに絶滅寸前でした。

それらを保護するために、最初に防鹿柵が設置されたのは2008年4月でした。幸いなことに、息も絶え絶えであった林床植物たちは防鹿柵の中で順調に回復し、今ではシカの食害を受ける以前に近い状態までになりました。

今回は2008年に設置した防鹿柵に隣接あるいは取り囲むように大きな防鹿柵を設置したのですが、その目的は、元氣よく回復した林床の植物たちが、新たに防鹿柵で守った場所に生育地を拡大することによって、より広い範囲にわたって多様性の高い林床植生を復活させることです。

設置して半年後の回復状況を調べたところ、高木層を形成している樹木の実生に加え、シコクブシのように毒を持っている植物や、シロバナネコノメソウのように成長点が地表すれすれの低い場所にあることでシカの食害を受けにくく、生き残ることができた植物が多く生育していました。マネキグサやアズマガヤなどシカの食害に弱い植物の復活にはもう少し時間がかかりそうです。

さおりが原からカヤハゲに向かって少し登った、通称ケヤキサコと呼ばれているところにも総延長140mの防鹿柵を設置しました。ここは昔、お亀岩避難小屋を建設する時に、必要な資材を運搬するための架線を張った場所で、高木層が伐採され林床が明るくなっています。新しく設置した防鹿柵の中に、もともと成立していた森林を復活させるために、トチノキ、ケヤキ、ブナなどの稚樹を植栽しました。林冠が開けていて太陽の光が十分注ぐような明るい林床には、イワヒメワラビなどが群生する可能性が高いので、今回植栽した稚樹がそれらに被圧されて枯れてしまわないように、植栽した稚樹の周辺の草刈りを行うなど、

しばらく見守る必要があるでしょう。

■ 東九州支部 飯田 勝之

1. シカの食害とスズタケ枯死の調査

九州山地の自然林荒廃が広範囲で進行し、同時にスズタケが至る所で全滅状態になっているが、これらがシカの繁殖による食害と関係しているのではないかといわれており、その実態と経過観察を目的として大分県植物研究会と共同作業で取り組みを始めて4年を経過した。

本谷山西の標高1400mの稜線上に県が設置した定点観測地点があり、ネットで囲った内側と、その横の地点のスズタケの生育状態の差を調査することや、尾平越から本谷山に至る稜線の樹木の食害状況や、スズタケ枯死の進行状態の観察などがその主な作業で、6月と10月の各第1土曜日を定期観測日としており、支部会員7〜9名と同会のメンバー7〜9名がチームを組んで行っている。この観察作業は大分県植物研究会が県の委託を受けて実施するものを、当支部がお手伝いをするかたちで行ってきたものであるが、平成28年度でこの委託期

間を終了し、調査報告書も発行されている。

しかし、その後も経過観察をしていくことで、同山域におけるシカの食害と、スズタケをはじめとした植生の変化や推移を見守ることに意義があるのではないかということになって、29年度以降も引き続き6月と10月の年二回の調査活動を続けることとなり、去る6月3日にその活動を実施した。

2. 清掃登山

毎年10月に九重山坊ガツルのアセビ小屋で支部の合宿を行っているが、その往復で登山道の清掃を行うことを恒例としている。このため、アセビ小屋への入山、下山ルートは毎回変更し、数多い九重山の登山ルートとその都度選んで行っている。近年の傾向として、以前のように山道に空き缶、空き瓶、たばこの吸い殻などのいわゆるゴミ類はかなり少なくなったが、山道での落とし物のタオルやバンダナ、手袋、ビニール袋などが多く見られる。また、登山者が勝手に付けたと見られる目印のビニールテープやプラスチック製の無意味な道標などもあり、これらの撤去なども行っている。

3. 大船山のミヤマキリシマ保護活動

国立公園特別保護区内で国の天然記念物

に指定されている、大船山山頂付近のミヤマキリシマが、成長するノリウツギやヤシヤブシなどの日陰となって枯死する状況が見られ、初年度は県が環境省の許可を受けて支障木の除去を行う作業を実施し、これに支部会員もボランティアで作業に参加した。しかしその後には再発芽する支障木も除去しなければ保護につながらないので、毎年ボランティアによる自主活動で行われており、これに支部会員が自主参加のかたちで従事している。

■ 宮崎支部

前原 満之

宮崎支部の自然保護活動は、2001年（平成13年）4月の委員会制度発足を契機に、自然保護委員会の活動として積極的に取り組むことになった。

1. 森づくり活動

登山を通じて自然に親しんでいる我々は、登山行為そのものが自然を傷つけずには成り立たないことを痛感する中で、自然に対しなすべき具体的な実践活動として森づくりを始めることになった。

2001年（平成13年）〜2002年（平

成14年)、3カ所に植樹後、毎年6〜9月に2回、3月に1回の育林作業を実施している。最後までカヤの繁茂が衰えなかった田野の森も、ようやくカヤは点在するほど少なくなってきた。今や山には水が湧き出し、春には会員が種から育てた苗木のヤマザクラが咲いている。

(1)宮崎支部森づくり活動の特徴

宮崎支部の森づくり活動は、自然保護委員会が担当し、会員のみで活動している。支部における一般市民との連携については、自然保護委員長が事務局をしている市民活動団体「水源の森づくりをすすめる市民の会」に団体加入しており、そこでの活動が市民と連携した活動となっている。

(2)今後の予定

3ヶ所とも下草刈が一段落したので、今後は当面、若干の下草刈と枝打ち徐伐等の育林作業となる。その後については、会員の高齢化もあり、新たにフィールドを確保し、植樹しての森づくりは厳しい状況と思われる。今後は森づくりにとらわれず、自然保護の実践活動をどう取り組むか検討していきたい。

2. 宮崎自然休養林の登山道点検報告

宮崎森林管理署から当支部に対し、宮崎自然休養林登山道の点検・保全巡視の依頼があり(2002年(平成14年)徳蘇山系。2011年(平成23年)双石山系)、随時、会員からの情報に基づき登山道の状況を点検、報告し、森林管理署からも報告に基づく改善結果の状況報告をいただいていた。しかし2016年5月、森林管理署より登山道の管理主管が森林管理署から「宮崎自然休養林保護管理協議会」へ移行したことにより、森林管理署としての登山道の点検・保全巡視の依頼は終了したいとの申し出があった。従って今後は窓口が右記協議会になるが、協議会は他の山岳団体、ボランティアの方々等関わっており、協議会の取り組み状況を見つつ、今後の対応を考えていきたい。

3. 清掃登山

1996年(平成8年)から毎年12月、双石山、樹鉢山、花切山、青井岳等の清掃登山を実施している。宮崎市街地に近く、多くの人が訪れる山をきれいに保つていきたい。

【購読料のお願い】

●本紙を購読されている方は、来年度(四月〜三月)の年間購読料として1千円を「郵便振替用紙」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

(郵便振替用紙を同封します)

【カンパのお願い】

●購読者以外の方(理事、支部長、支部事務局長、自然保護協力委員、支部自然保護委員、贈呈者等)で送料等のカンパにご協力頂ける方は、「郵便振替」または「郵券」でお送り頂きたくお願いいたします。

●送り先

●郵便振替

00180・4・710688

加入者名 川口章子

●住所

〒274・0063

船橋市習志野台4・43・1・102

川口章子

◇自然保護委員会の活動記録◇

〔三月度〕

報告・連絡事項

- ① 山岳団体自然保護環境連絡会主催・後援環境省と開催の『第1回 山岳自然環境セミナー』が3月11日(土)オリンピック青少年センターで開催。『木の目草の芽』127号に報告掲載予定。

② 自然保護委員会報告事項

3月22日(水) 18時30分〜開催

*『木の目草の目』126号発行・発送。

*127号の発行・4月13日発送予定。

協議事項

① 2017年度活動方針案を検討

- A シカ問題 B ライチョウ問題
C リニア建設問題 D 自然保護諸問題
E 山岳団体自然保護環境連絡会議
F 自然観察会 G 各支部の自然保護委員会との連絡 H 「木の目草の芽」発行
I 新会員獲得施策

各テーマの担当と活動を4月の委員会で決める。

- ② 富澤委員の退任に伴う事務引き継ぎについて協議。

〔四月度〕

報告・連絡事項

- ① 山岳団体自然保護連絡会 4月14日(金) 山田、川口出席 山岳におけるシカの害の写真募集をする候補地案を選定し5月に提案。

② 自然保護委員会報告事項

4月26日(水) 18時30分〜開催

*3月27日(月) 会長、副会長によるヒアリングに山田、谷内、川口出席。

*第4回 自然観察会4月22日(土) 武蔵増戸〜小峰公園 参加者7名

*広島県八幡湿原に風力発電設置計画の説明会があるので参考資料がほしい。

協議事項

① 2017年度活動の各担当者決まる。

② * 富澤委員退任に伴う事務引き継ぎ。

* 委員会の仕事分担を協議。

* 会報はなるべく委員全員で発送するよう、に定例委員会開催日に合わせて17時頃からする。

③ 自然保護委員を近隣の支部に呼びかける。

④ 委員会開催の週と曜日、開催時間の変更。

第2週・月曜日・19時〜開催に変更
次回は5月9日(月) 19時〜開催。

〔五月度〕

報告・連絡事項

- ① 山岳団体自然保護連絡会、会則改定により本年度より年会費・5千円納付。

② 自然保護委員会報告事項

5月9日(水) 19時〜

* 東海支部自然保護委員長・井藤恵美子さんが就任。

協議事項

① 2017年度活動方針テーマ別、グループの年間活動概要報告、協議行う。

② 全国集会の準備状況と作業分担について。

③ 山岳団体自然保護連絡会に提案の、山岳におけるシカ害の写真を募集する候補地案の選定。

④ 広島支部による「八幡湿原風力発電設置」への意見書提出について協議し、了承した。

〔編集後記〕全国集会レジメ号をお届けします。皆様ご協力ありがとうございました。

標高1500mの亜高山帯(上高地)で、ただいま成長著しい外来種、エゾノギンギシとヒメジオンの抜き取りに日々追われながらの編集作業となりました。...

元川